

末黒野

すぐろの

6月号 (通巻826号)



緑
立
つ

小川玉泉

小公園訪ふ人あらず更紗木瓜
中腹に白亜の館山笑ふ
花のもと一輪車漕ぐおさげ髪
初花や鳴立沢の水ゆたか

町の木の黒松囲み黄水仙
緑立つ大磯宿の松並木
城山をわがもの顔に恋の鳥
展望台日の燦々と土佐水木
腰下ろす石に零るる白馬酔木
石組は如庵の遺跡芝青む
割り竹の袖垣に跳ね落椿
細やかに日差しを返し櫻萌ゆ

春 酣

松本三千夫

三 榎 や 一 人 息 子 に 孫 二 人
連 翹 や ひ かり 砕 きて 喪 の 庭 に
野 遊 び の 一 人 の 気 ま ま 石 に 坐 し
母 の 忌 を 待 た で 辛 夷 の 傷 み 初 む
波 郷 師 の ふ ぶ く と 詠 め り 雪 柳
春 禽 や 耳 朶 に 鼻 梁 に 風 や さ し
森 抜 け て う ぐ ひ す の こ ゑ 耳 朶 に
草 木 瓜 や 妊 婦 拝 む 寺 の 庭
谷 と 書 き や つ と 読 む 町 水 温 む
柱 状 墓 碑 の 裏 T O S O N と う ら け し
玉 眼 の 西 行 座 像 涅槃 槃 西 風
庵 主 の 句 碑 読 め ば 賜 る 初 音 か な

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

春 星

黒滝志麻子

人中にゐてことさらの歩の余寒
会津なまりの友ゐて城に春の雪
子の声の風に散らばり柳の芽
鐘一つ文殊に撞きぬ牡丹の芽
島径の日の燦燦と梅日和
秩父嶺の巖に雪ある雛の市
光合ふものみな淡し鳥の恋
春星やポストの口の濡れてをり
帆船の遠くに見えて野に遊ぶ
春禽の湧ききて句碑の黙ほぐす

日 永

田中臥石



白梅の風捉へたる長寿眉
地下鉄に迷ふ日永の渋谷駅
ふるさとは雪てふ彼岸桜かな
友来たる春曙の光り負ひ
伊予柑の匂ふ机を拭きにけり
八十の歳や妻籠の木の芽和
五平餅食ぶ春昼の妻籠坂
馬子唄の流るる妻籠八重椿
牛五頭曳きて少年青き踏む
日和見の老漁夫通ふ紫雲英径

初蝶

松田泰子

春を待つ木曾の檜の俎も
臙より抜け来て黒き貨車となる
いつ見ても明るいものに春障子
少年に無口な日あり豆の花
初蝶を見しこと人にまだ告げず
ゆつくりと地に着きて割れしやばん玉
風船を母にあづけて子の走る
人容れてしばらく揺るる芽吹山
夕映にまぎれこんだる残り鴨
振り向きて軽き会釈や梅匂ふ

独り

森清信子

薄氷に日差の馴染む林泉の池
日矢ほぐす金縷梅の黄や丸木橋
料峭や人の流れに乗り独り
きませて開くる枝折戸梅真白
黙深むる人林泉の臥竜梅
のびやかなる和の字の幅や春めきぬ
炊きたてのふりかけご飯木の芽晴
青空を映して昏し蝌蚪の国
みどり児のこぶしに力牡丹の芽
春宵の渚漁る小鷺かな

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



竹の秋 堺 昌子

空のいろ日に日に變はり山笑ふ
初午の縷縷とつづきぬ笛太鼓
城址の少年野球木の芽風
野遊びの思はず口に童歌
どの道も海へとつづく鱒東風
街騒のとどかぬ城址竹の秋
強東風や昔を今に松並木

鳥雲に 中野久雄

春 雪 西川みほ

里山の芽吹き促す鳥のこゑ
行き止まる路地の日集め梅真白
月影の色やはらかし春の宵
羽搏くや臆て高舞ひ鳥雲に
風誘ひいよよ色めく紅しだれ
氏神の清めの水も温みたり
ぼつかりと浮かぶ綿雲山笑ふ
手に浸むる余寒の水に銭洗ふ
残雪に耀きこぼす朝日かな
春雪や鞠のごとくに朝雀
野良猫を手なづけ婆の日向ぼこ
強ひらるる白魚の味見旅の浜
鳩を追ふ兎のすり足や青き踏む
短足の犬の蹴散らす草青む

春立つ 森清堯

ほほゑみのやうな木の瘤四温晴
大島の空の鶺鴒色春立てり
浅春の暮色を灯し島泊り
差し潮の勢ふ河口や春兆す
騒めきは芽吹きをあかし柞山
好日や林泉の要の枝垂梅
噛み合はぬやりとり増えて春愁ひ

揚雲雀 吉田きみえ

城跡は空堀りのみや春の風
揚雲雀城址に残る物見台
谷川の音のひびかひ梅見茶屋
梅活けて一人に広き十畳間
文添へて里よりとどく干若布
曾孫より若やぎもらひ春惜しむ
花辛夷たかまる谷戸の水の音

梅林 石黒興平

刃めく風や南下の寒気団
日に風にセピア色増す懸大根
大根干す動くともなき沖の船
人屋めく喫煙室や春寒し
春くや白さ浮き立つ梅林
疾走の若駒の四肢風生みぬ
菜の花や土の乾ける牛の腹

水のかゑ 岡田史女

ひねもすを雨のつらつら椿かな
水門の開け放ちあり春の虹
三極の花や炉煙舎解かると
山裾に水のかゑたつ梅真白
合格の手足大きくのぼしけり
舳挿して湖の暮色のただよへり
みな湖へ続く小径やさへづれり

青炎集

小川玉泉選



横浜 太田良一

横浜 有賀鈴乃

天井に届かむばかり雛の段
席つめて世間話や梅見茶屋

砂に文字書けば近寄る春の波

山畑や春水運ぶ猫車

啓蟄や商家を出づる女下駄

田の水の春水となる夜明けかな

横浜 及川照子

横浜 園田恵子

花菜風のせて双子の乳母車

菜の花を散らし昼餉のバスタカナ

花菜畑展ける先の海の青

沈丁は誕生花吾も香らばや

日は西に野遊びの児を肩車

嘴赤き餌を食む鳥や春うらら

懇ろに処分と決めしひな飾る

梅が香や心して踏む池の石

紅梅と言ふも濃淡競ひけり

山菜莢や小流れの音聴きすます

葉のかげに花芽のぞかす君子蘭

春光へ少年放つブーメラン

笹鳴や幣新しき天満宮

紅白の梅の寄り添ふ野の小径

明け渡る湖に一景蜩舟

筆塚や下枝のふるる枝垂梅

桜鯛釣りの船出づ暁の闇

俎板に銀鱗とばし桜鯛

横浜 橋場美篤

起き抜けの一步の厨凍ゆるむ

富士見ゆる島の浦風黄水仙
青年のリユックはみ出し梅匂ふ
身繕ひ忙しや池の春の鴨
落味噌を旨しと夫の一人酒
神鈴の高鳴る社銀杏の芽

大網白里 亀卦川菊枝

観音の千手浮き立つ辛夷の芽
菩提寺の久しき無住つくづくし
椿る日となりぬ三月十一日
点滴につながれて寝ぬ春の昼
隣り合ふ墓にも手向け入彼岸
すれ違ふ人と会釈を彼岸墓地

横浜 高橋明

それぞれの連れの視線や笹子鳴く
蛤の汁を盛る椀金模様
玻璃ごしに覗くこけし屋春炬燵
夕照にいそぐ一群鳥帰る
ラバウルを探す地球儀春の塵
吟行の誘ひに乗りぬ四温晴

横浜 山崎稔子

梅が香やお礼の絵馬の十重二十重

冲霞動くもなきスクーナ
彫深き鬚文字の碑や冴返る
浮き雲の羊の形や水温む
戯るる梢の鶯鳴きもせず
護摩焚きの読経漏るるや初桜

横浜 松浦哲夫

まほろばの国分寺跡草青む
剪定の櫛の空や雲あらず
春一番保母も園児と小走りに
黄水仙明るき庭となりにけり
暖かき日差しはあれど山白し
春めくや光を返す池の面

横浜 高橋光民

三段に枝の作られ豊後梅
餌を探す鴨の動きや藪椿
切株に座してハミング山笑ふ
参道の花芽の香りもらひけり
池の面に鯉の久しや水温む
畦道に子等はペン執り花菜風

耕 土 集

松本三千夫選



本間せつ子

日々変はるあまたの貌の春の山
住み古りて引戸重たし春の月

横浜 佐々木永子

故郷に山の神在す露の臺
春泥や宙にさまよふ左足

川沿ひに行けば近道水温む
紺碧の海を控へて梅千本

日照雨やみ庭のもの芽光りけり

流水の饒舌なるやオホーツク
春寒や梢に風の集まりぬ
春雨や森は密かに息づきぬ

春暁の雲鴛色や旅立つ日

野村 重子

鶯の初鳴き聞きぬ竹の園

中村 高也

日矢のさす綺羅ひとところ春の潮

雨あとの土の匂ひや風光る

醒め遣らぬ目の先春の白き月

大島の灯の淡淡と涅槃西風

春光や水に弾かれ目の眩み
春の海空の折り目の水平線
たんぼぼの黄ではじまりぬ花の道

落の臺雪のゑくほに影ごぼし

飛田 典子

くさめ三つ話の続きそれつきり

岡 美智子

ふくらみぬ梅の蕾のくれなゐに

海鳥の翼のびやか春の空

古新聞出すや朝の朧月

風光る堰のリズムの単調に

手に受けてなごりの雪と思ひけり
両の手に湯吞を包む余寒かな
ふくらめる辛夷のつぼみ手につつむ
一雨に名草の芽吹き鮮やかに